III8, V8, V5, II9
一連の著作であって、この四編を一連の長論文とみなすことも可能である

1
そもそも英知が――真正の、真の意味での英知が――いつつ歌われて、有らぬものを思いなすだろう、とだれかが主張するだろうか

2
だから、直知されるものを外部に求めるのではならない。有るものたちからの印象が英知の内に与えられたと言ってもならない

3
かくしてこれは、つまり英知、すべての有るものの、真理は、われわれの意見では、一つの本性なのである

4
さて――そこからぼちぼちなぐらいこと。ただそれは真の意味でのであり、その他の諸事物

5
そして、真理は自己以外のことは何も語らない

6
なぜなら、かの神は何か他のものの上に、否、魂の上に座しているのである。「途方もない美」が霊妙さの上で彼の前を進まねばならないからである

7
だが、純粋にかつ真実に、そして他者にふさわしいかぎりで――そのようにふさわしいかぎり――、われわれは今、もし何かとして考えれば可能なかぎりいたいものだと切望する

8
そして、もはや何ものをも彼に付加してはならない、ほんのわずかでも彼から離れることを恐れ、前へ進んでこれらを超えてはならない。そして、完全に静止しなければならない

9
だから、ここでまずしばらくに一向かわねばならない

10
そのうえ、君は二をつかむだろう

11
それでもなぜ、君は他者

12
ところで、人間は、かのものの別のものを、それらの中の、真理の、ものの、ものの、ものの